

0SP-8939-42

US
Pro

JC530 U S 09/510349



日本特許庁

PATENT OFFICE
JAPANESE GOVERNMENT

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されて
いる事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed
with this Office.

出願年月日

Date of Application:

1999年 4月16日

出願番号

Application Number:

平成11年特許願第110152号

出願人

Applicant(s):

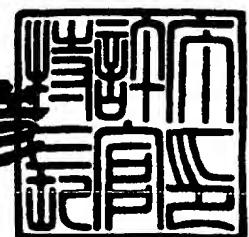
日本電信電話株式会社

CERTIFIED COPY OF
PRIORITY DOCUMENT

2000年 1月28日

特許庁長官
Commissioner,
Patent Office

近藤 隆彦



【書類名】 特許願

【整理番号】 NTTH115121

【提出日】 平成11年 4月16日

【あて先】 特許庁長官 殿

【国際特許分類】 H04L 12/00

【発明の名称】 トライック観測装置、データグラム転送システムおよびデータグラム転送方法

【請求項の数】 20

【発明者】

【住所又は居所】 東京都新宿区西新宿三丁目19番2号 日本電信電話株式会社内

【氏名】 栗本 崇

【発明者】

【住所又は居所】 東京都新宿区西新宿三丁目19番2号 日本電信電話株式会社内

【氏名】 清水 敏司

【特許出願人】

【識別番号】 000004226

【氏名又は名称】 日本電信電話株式会社

【代理人】

【識別番号】 100064908

【弁理士】

【氏名又は名称】 志賀 正武

【先の出願に基づく優先権主張】

【出願番号】 平成11年特許願第 49215号

【出願日】 平成11年 2月25日

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 008707

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9701417

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 トライピック観測装置、データグラム転送システムおよびデータグラム転送方法

【特許請求の範囲】

【請求項1】 現在よりあらかじめ決められた期間前までの、ユーザが網内に送信または網から受信したデータグラムに関するトライピック情報を観測するトライピック観測機能と、

該トライピック観測機能により得られたトライピック情報からデータグラムの送出に対する網の評価により得られるプレファレンス値を計算するプレファレンス値計算機能と、

該プレファレンス値計算機能により計算されたプレファレンス値を評価値として前記送信されるデータグラムのヘッダに書き込むプレファレンス値挿入機能とを備えたことを特徴とするトライピック観測装置。

【請求項2】 ユーザ端末から送信されたデータグラムを受けたデータグラム転送装置が、そのデータグラムのヘッダに記載された転送宛先アドレスに向って前記データグラムをリレーするデータグラム転送システムにおいて、

前記データグラムに関するトライピック情報に基づいて網に対するインパクトを評価し、その評価値を前記ヘッダに書き込んでプレファレンス値を付けるトライピック観測手段を設けたことを特徴とするデータグラム転送システム。

【請求項3】 前記データグラムのヘッダに記載された前記評価値に従った順序によりデータグラムの転送処理を行う手段を有することを特徴とする請求項2に記載のデータグラム転送システム。

【請求項4】 前記データグラム転送装置が、前記データグラムをいずれかの入力インターフェース部からいずれかの出力インターフェース部へ競合することなく転送するバックプレーンスイッチ部を有し、

前記出力インターフェース部が、受信したデータグラムのヘッダから前記プレファレンス値を取得し、そのプレファレンス値の小さいものから順に、輻輳状態とならない範囲で転送すべきデータグラムを選択して、優先的にバッファメモリに書き込むバッファ書き込み制御部を有することを特徴とする請求項2に記載のデ

ータグラム転送システム。

【請求項5】 前記トラヒック情報が、データグラムのサイズまたは連續して送出されるデータグラムの時間間隔であることを特徴とする請求項2に記載のデータグラム転送システム。

【請求項6】 前記トラヒック観測手段が、前記プレファレンス値としてデータグラムのヘッダに存在するデータグラムのサイズフィールドを利用するなどを特徴とする請求項2に記載のデータグラム転送システム。

【請求項7】 前記トラヒック観測手段が、一つ前の前記データグラムの送出時刻と現在時刻との差の逆数およびこれらの各時刻に送出および到着したデータグラムの大きさにもとづいて得られる値をプレファレンス値として計算することを特徴とする請求項2に記載のデータグラム転送システム。

【請求項8】 前記トラヒック観測手段が、前記データグラムのサイズおよび連續するデータグラムの間隔からスライディングウィンドウ方式による平均レートをプレファレンス値として計算することを特徴とする請求項2に記載のデータグラム転送システム。

【請求項9】 前記トラヒック観測手段が、前記データグラムのサイズおよび連續するデータグラムの間隔から観測期間の平均レートをプレファレンス値として計算することを特徴とする請求項2に記載のデータグラム転送システム。

【請求項10】 前記トラヒック観測手段が、ユーザが送出したデータグラムの個数と受信したデータグラムの個数との差をプレファレンス値として求ることを特徴とする請求項2に記載のデータグラム転送システム。

【請求項11】 前記バッファ書き込み制御部が、受信したデータグラムのプレファレンス値をプレファレンス値取り出し機能により取得し、このプレファレンス値をキーにしてプレファレンス比較機能にてソーティングを行い、データグラムにプレファレンス値の昇順に順序付けを行い、さらにその順序に従って書き込み制御機能にバッファメモリに対する書き込み処理を行わせることを特徴とする請求項4に記載のデータグラム転送システム。

【請求項12】 前記バッファメモリが複数の優先順位を持ったクラス別バッファメモリ部を有し、前記バッファ書き込み制御部がプレファレンス値に従つ

てその優先順位を持った複数のクラスを選択し、前記データグラムの書き込みを行うことを特徴とする請求項4に記載のデータグラム転送システム。

【請求項13】 前記プレファレンス値の取得処理が、データグラムの到着率に応じて変更可能な可変間隔または常に固定の固定間隔の期間ごとに行われるなどを特徴とする請求項11に記載のデータグラム転送システム。

【請求項14】 前記バッファ書き込み制御部では、データグラムの前記バッファメモリへの書き込み前に転送判断を行い、転送を行わないと判断した場合には、前記バッファメモリに空き領域があっても廃棄を行い、転送を行うと判断した場合には前記バッファメモリへの書き込み処理を行うことを特徴とする請求項11に記載のデータグラム転送システム。

【請求項15】 前記バッファ書き込み制御部が、既にバッファメモリに書き込んである処理済みデータグラムのプレファレンス値の総和を計算し、この計算結果に基づく確率計算を行って、その確率に応じてデータグラムの廃棄を行うことを特徴とする請求項11に記載のデータグラム転送システム。

【請求項16】 前記バッファ書き込み制御部が、データグラムにプレファレンス値の昇順に順序付けを行った後、その順序付けに従ったバッファメモリの使用量の概算値に基づく確率を求め、得られた確率に応じてデータグラムの廃棄を行うことを特徴とする請求項11に記載のデータグラム転送システム。

【請求項17】 前記バッファ書き込み制御部が、適当なタイミングにてスレッショルド値を計算しておき、到着したデータグラムのプレファレンス値と前記スレッショルド値との比較を行い、プレファレンス値がスレッショルド値より大きい場合に前記データグラムを廃棄し、小さい場合に前記バッファメモリへの書き込みを行うことを特徴とする請求項11に記載のデータグラム転送システム。

【請求項18】 前記バッファ書き込み制御部が、適当なタイミングにてスレッショルド値を計算しておき、到着したデータグラムのプレファレンス値と前記スレッショルド値との比較を行い、これらの各値の差を入力とする関数により確率を計算し、得られた確率に応じてデータグラムの廃棄を行うことを特徴とする請求項11に記載のデータグラム転送システム。

【請求項19】 前記バッファ書き込み制御部が、あらかじめ決められた範囲のデータグラムの到着、転送および廃棄のうちのいずれかの事象が発生した時刻および前記プレファレンス値を保存するプレファレンス値保存機能を有し、これらのプレファレンス値を用いて前記スレッショルド値が計算されることを特徴とする請求項17または請求項18に記載のデータグラム転送システム。

【請求項20】 ユーザによるデータグラムの送出時に、そのデータグラムが網に対してどのようなインパクトを与えるかという評価を行い、この評価を反映したプレファレンス値を計算して、その計算結果を前記データグラムのヘッダに書き込み、前記プレファレンス値による順序付けに従って前記データグラムの転送処理を行うことを特徴とするデータグラム転送方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

この発明は、高速コンピュータ間通信を提供する公衆網におけるベストエフォート型データ通信サービスを提供するためのトラヒック観測装置、データグラム転送システムおよびデータグラム転送方法に関する。

【0002】

【従来の技術】

インターネットで用いられているインターネットプロトコル（IP）パケットのように、その配達が網によって保証されないデータユニットをデータグラムと呼ぶ。このようなデータグラムの転送によりデータ通信サービスを実現する網をデータグラム転送網と呼ぶ。このようなデータグラム転送網では、網内のデータグラム転送装置（例えば、インターネットではルータと呼ばれる装置が相当する）が、任意の大きさを持ったデータグラムをそのヘッダに記載された宛先アドレスに向かってリレーすることにより、データ通信サービスが実現される。また、このデータグラム転送装置では、自らの処理能力を超えるデータグラムがごく短い期間に集中して到着した場合（これを輻輳状態と呼ぶ）、到着したデータグラムを適宜廃棄してしまう。このため、データグラム転送網では、「網は個々のデータグラムをその宛先への配達を目指し、網内の転送装置の能力の可能な限りの

転送を行う」というベストエフォート型データ通信サービスを提供することとなる。

【0003】

図15は、これまで述べたようなデータグラム転送システムを構成するデータグラム転送装置の一般的な構成を示すブロック図であり、このデータグラム転送装置は、複数の入力インターフェース部（以下、入力I/F部という）1と複数の出力インターフェース部（以下、出力I/F部という）2とが、一つのバックプレーンスイッチ部3に接続された構成をとっている。このバックプレーンスイッチ部3はいずれか任意の入力I/F部1からいずれか任意の出力I/F部2へ、内部で競合することなくデータグラムを転送する能力を持っている。

【0004】

図16は、図15における入力I/F部1を詳細に示す。この入力I/F部1は、ラインI/F部1a、転送宛先テーブル1b、転送処理部1cおよびデータグラム転送部1dから構成されている。そして、この入力I/F部1では、ラインI/F部1aにおいて入力リンクからのデータグラムが受信されると、転送処理部1cは転送宛先テーブル1bを参照し、宛先アドレスから所望の出力I/F部12を決定するとともに、前記バックプレーンスイッチ部3を介して受信したデータグラムを所望の出力I/F部2へ転送させるために、適当なデータグラム転送部1dへデータグラムを送る。

【0005】

図17は、図12における出力I/F部2を詳細に示す。この出力I/F部2は、データグラム受信部2a、バッファメモリ2b、バッファ書き込み制御部2c、バッファ読み出し制御部2dおよびラインI/F部2eから構成されている。そして、この出力I/F部2では、バックプレーンスイッチ部3よりデータグラム受信部2aに受信されたデータグラムは、バッファ書き込み制御部2cの処理方法に従って、バッファメモリ2bに書き込まれ、出力リンクが利用可能になるのを待つ。すなわち、図18のフローチャートに示すように、あらかじめ決められた順（通常はI/F番号の昇順など）に入力I/F部1を選択し（ステップS1）、そこから到着しているデータグラムの有無を調べる（ステップS2）。

到着している場合には、これをバッファメモリ2bの空き領域に書き込み（ステップS3）、未処理の入力I/F部1があれば（ステップS4）、ステップS1以下の処理を繰り返し、なければ終了する。これらの入力I/F部1に対する処理は、出力リンクにおける処理単位時間（通常は一つのデータグラムを送出する時間）に対して入力I/F部1の数がnの場合、n倍の速度で行う必要がある。一方、バッファ読み出し制御部2dは、ラインI/F部2eが空きになると、書き込まれた順にバッファメモリ2bからラインI/F部2eへデータグラムを転送する。そして、このデータグラムはラインI/F部2eにより出力リンクへ送信される。

【0006】

従来のデータグラム転送装置では、この出力I/F部2におけるバッファ書き込み制御部2cの処理方法として、バッファメモリ2bに空きがある限り、到着した順にデータグラムを書き込んで行くという方法が採用されている。この処理方法とバッファ読み出し制御部2dにて書き込まれた順に読み出す方法とを組み合わせた方法は、最初に到着したデータグラムが最初に出力されることから、ファーストインファーストアウト（FIFO）方式と呼ばれる。

【0007】

また、バッファメモリ2bに空きがない期間にデータグラムが到着した場合、通常それらはすべて廃棄されるが、特にインターネットにおいては、バッファメモリ2bを使い尽くす状況を回避し、多くのデータグラムが一度に廃棄されるという状況を防ぐことで、リンクの利用効率を高めることが可能となる。そのため、インターネットで用いられるルータでは、バッファ書き込み方法として、バッファメモリにたとえ空きがあったとしても、バッファメモリの使用量に応じた適当な確率であらかじめデータグラムを廃棄してしまうというランダムアーリーディテクション（RED）方式が採用されている。

【0008】

また、図19はこのRED方式による書き込み処理手順を示す。これは、あらかじめ決められた順に入力I/F部1を選択し（ステップS1）、そこから到着しているデータグラムの有無を調べ（ステップS2）、バッファメモリ2bの使

用量の概算値を求め（ステップS5）、この概算値に基づいた確率を求め（ステップS6）、続いて転送判断を行い（ステップS7）、この判断結果に基づき、転送を行わない場合にはバッファメモリ2bに空きがあっても廃棄を行うという手順をとる。

【0009】

このように、従来のデータグラム転送装置にあっては、バッファメモリ2bへの書き込み方法に注目すると、FIFO方式の場合はデータグラムの到着順に、一方、RED方式の場合でも、バッファメモリ2bの使用量に応じた適当な確率でパケットを廃棄するものの、基本的には到着順にバッファメモリ2bへデータグラムを書き込んでいる。そして、書き込み時にバッファメモリ2bに空きがない場合にはデータグラムを廃棄するというものであり、また、データグラムを転送するか廃棄するかの判断を、データグラムそのものに関する情報ではなく、出力I/F部2での情報、つまりバッファメモリ2bの利用状況、例えば、バッファメモリに空きがない、バッファメモリの空きが10%を下回っている等に基づいて行っている。

【0010】

【発明が解決しようとする課題】

しかしながら、このような方法を用いる従来のデータグラム転送システムにおいては、データグラム転送装置が、データグラムの転送処理を、出力I/F部2で得られる情報のみしか考慮に入れずデータグラムの到着順に行っており、短い期間に他のユーザより多くのデータグラムを送信することで、送信したデータグラムの廃棄も多くなるが、全体としては他のユーザより多くの網資源を獲得するということが可能となる。多くのユーザがより多くの網資源を獲得することを目的として、このように多くのデータグラムを送出した場合、網内のそれぞれのデータグラム転送装置は輻輳状態に陥り、送出されたデータグラムの多くを廃棄することとなる。この結果、廃棄されずに最終的な宛先まで到着するデータグラムの数が急激に減少し、網全体としての実効的なデータ転送能力が低下した状態、つまり輻輳崩壊状態に陥ってしまうという課題があった。

【0011】

この発明は前記課題を解決するものであり、データグラム転送装置の出力I/F部におけるバッファ書き込み制御部が、データグラムの送出に対する網の評価により得られる情報（プレファレンス値）を利用し、データグラムを到着順以外の方法で転送処理を行うことで、ユーザがより多くの網資源を獲得しようとして必要以上のデータグラムを送出することを抑制でき、これにより輻輳崩壊状態に陥らない安定したデータグラム通信網を実現できるデータグラム転送システムを得ることを目的とする。

【0012】

【課題を解決するための手段】

前記目的達成のため、請求項1の発明にかかるトラヒック観測装置は、現在よりあらかじめ決められた期間前までの、ユーザが網内に送信または網から受信したデータグラムに関するトラヒック情報を観測するトラヒック観測機能と、該トラヒック観測機能により得られたトラヒック情報からデータグラムの送出に対する網の評価により得られるプレファレンス値を計算するプレファレンス値計算機能とを有し、プレファレンス値挿入機能に、前記プレファレンス値計算機能により計算されたプレファレンス値を前記評価値として前記送信されるデータグラムのヘッダに書き込ませるようにしたものである。

【0013】

また、請求項2の発明にかかるデータグラム転送システムは、ユーザ端末から送信されたデータグラムを受けたデータグラム転送装置が、そのデータグラムのヘッダに記載された転送宛先アドレスに向って前記データグラムをリレーするデータグラム転送システムに、前記データグラムに関するトラヒック情報に基づいてユーザのトラヒックの網に対するインパクトを評価し、その評価値を前記ヘッダに書き込んで、この評価に従った順序による転送処理を行わせるトラヒック観測手段を設けたものである。

【0014】

また、請求項3の発明とかかるデータグラム転送システムは、前記データグラムのヘッダに記載された前記評価値に従った順序によりデータグラムの転送処理を行う手段を設けたものである。

【0015】

また、請求項4の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記データグラム転送装置に、前記データグラムをいずれかの入力インターフェース部からいずれかの出力インターフェース部へ競合することなく転送するバックプレーンスイッチ部を設け、前記出力インターフェース部が、受信したデータグラムのヘッダから前記プレファレンス値を取得し、そのプレファレンス値の小さいものから順に、輻輳状態とならない範囲で転送すべきデータグラムを選択して、優先的にバッファメモリに書き込むバッファ書き込み制御部を設けたものである。

【0016】

また、請求項5の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記トラヒック情報を、データグラムのサイズまたは連続して送出されるデータグラムの時間間隔としたものである。

【0017】

また、請求項6の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記トラヒック観測手段に、前記プレファレンス値としてデータグラムのヘッダに存在するデータグラムのサイズフィールドを利用させるようにしたものである。

【0018】

また、請求項7の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記トラヒック観測手段に、一つ前の前記データグラムの送出時刻と現在時刻との差の逆数をプレファレンス値として計算させるようにしたものである。

【0019】

また、請求項8の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記トラヒック観測手段に、前記データグラムのサイズおよび連続するデータグラムの間隔からスライディングウィンドウ方式による平均レートをプレファレンス値として計算させるようにしたものである。

【0020】

また、請求項9の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記トラヒック観測手段に、前記データグラムのサイズおよび連続するデータグラムの間隔から観測期間の平均レートをプレファレンス値として計算させるようにしたものであ

る。

【0021】

また、請求項10の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記トラヒック観測手段に、ユーザが送出したデータグラムの個数と受信したデータグラムの個数との差をプレファレンス値として求めさせるようにしたものである。

【0022】

また、請求項11の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記バッファ書き込み制御部で、受信したデータグラムのプレファレンス値をプレファレンス値取り出し機能により取得し、このプレファレンス値をキーにしてプレファレンス比較機能にてソーティングを行い、データグラムにプレファレンス値の昇順に順序付けを行い、さらにその順序に従って書き込み制御機能にバッファメモリに対する書き込み処理を行わせるようにしたものである。

【0023】

また、請求項12の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記バッファメモリに複数の優先順位を有するクラス別バッファメモリ部を持たせ、前記バッファ書き込み制御部にプレファレンス値に従ってその優先順位を持った複数のクラスを選択し、前記データグラムの書き込みを行わせるようにしたものである。

【0024】

また、請求項13の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記プレファレンス値の取得処理を、データグラムの到着率に応じて変更可能な可変間隔または常に固定の固定間隔の期間ごとに行うようにしたものである。

【0025】

また、請求項14の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記バッファ書き込み制御部で、データグラムの前記バッファメモリへの書き込み前に転送判断を行わせ、転送を行わないと判断した場合には、前記バッファメモリに空き領域があっても廃棄を行わせ、転送を行うと判断した場合には前記バッファメモリへの書き込み処理を行わせるようにしたものである。

【0026】

また、請求項15の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記バッファ

書き込み制御部で、既にバッファメモリに書き込んである処理済みデータグラムのプレファレンス値の総和を計算させ、この計算結果に基づく確率計算を行わせて、その確率に応じてデータグラムの廃棄を行わせるようにしたものである。

【0027】

また、請求項16の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記バッファ書き込み制御部で、データグラムにプレファレンス値の昇順に順序付けを行わせた後、その順序付けに従ったバッファメモリの使用量の概算値に基づく確率を求めさせ、得られた確率に応じてデータグラムの廃棄を行わせるようにしたものである。

【0028】

また、請求項17の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記バッファ書き込み制御部で、適当なタイミングにてスレッショルド値を計算しておき、到着したデータグラムのプレファレンス値と前記スレッショルド値との比較を行わせ、プレファレンス値がスレッショルド値より大きい場合に前記データグラムを廃棄させ、小さい場合に前記バッファメモリへの書き込みを行わせるようにしたものである。

【0029】

また、請求項18の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記バッファ書き込み制御部にプレファレンス値とスレッショルド値の各値の差を入力とする関数により確率を計算させ、得られた確率に応じてデータグラムの廃棄を行わせるようにしたものである。

【0030】

また、請求項19の発明にかかるデータグラム転送システムは、前記バッファ書き込み制御部に、あらかじめ決められた範囲のデータグラムの到着、転送および廃棄のうちのいずれかの事象が発生した時刻および前記プレファレンス値を保存するプレファレンス値保存機能を持たせ、これらのプレファレンス値を用いて前記スレッショルド値を計算するようにしたものである。

【0031】

また、請求項20の発明にかかるデータグラムの転送方法は、ユーザによるデ

ータグラムの送出時に、そのデータグラムが網に対してどのようなインパクトを与えるかという評価を行い、この評価を反映したプレファレンス値を計算して、その計算結果を前記データグラムのヘッダに書き込み、前記プレファレンス値による順序付けに従って前記データグラムの転送処理を行うようにしたものである。

【0032】

【発明の実施の形態】

以下、この発明の実施の一形態を図について説明する。この発明のデータグラム転送システムで実行されるプレファレンス値を用いた選択的データグラム転送方法は、以下の2点を組み合わせて実行される。

1. 網はユーザのデータグラム送出時にそのデータグラムが網に対しどのようなインパクト（負荷）を与えるかという評価を行い、それを反映させた値としてプレファレンス値を計算し、それをデータグラムのヘッダに付与する。ここで、網に対してのインパクトが少ないものに対して、小さいプレファレンス値を与える。
2. 網内のデータグラム転送装置においては、データグラムの到着順ではなく、プレファレンス値による順序付けに従った順にデータグラムの転送処理を行う。具体的には網に対してのインパクトが少ないことを意味するプレファレンス値の小さいものほど高い確率で優先して転送を行うよう制御する。

【0033】

図1は前記データグラムの転送方法を実行するデータグラム転送システムを示すブロック図であり、ここでは一般的な網とユーザ端末との接続形態の様子とこの発明を実現する装置の一つであるトラヒック観測装置が導入される位置を具体的に示してある。これによればユーザ端末4からライン終端装置5およびアクセス網6を介して送信されたデータグラムは、網内のデータグラム転送装置Dにおいて、図16に示すような入力I/F部1の転送宛先テーブル1bに従って、宛先アドレスの示す端末までリレーされて行く。このアクセス網を終端するライン終端装置7と網内の最初のデータグラム転送装置Dとの間にトラヒック観測手段としてのトラヒック観測装置8が接続されている。

【0034】

図2はこのトラヒック観測装置8の構成を示し、これがトラヒック観測機能8a、プレファレンス値計算機能8bおよびプレファレンス値挿入機能8cにより構成され、これらのうちトラヒック観測機能8aは、現在よりあらかじめ決められた期間前までの、ユーザ網内に送信、あるいは網より受信したデータグラムに関するトラヒック情報、例えばデータグラムのサイズや連続して送出されたデータグラムの時間間隔などを観測し、保持する機能である。また、プレファレンス値計算機能8bは、トラヒック観測機能8aにより保持されている情報から決められた計算式を用いて、プレファレンス値を計算する機能である。また、プレファレンス値挿入機能8cは、到着したデータグラムに、プレファレンス値計算機能8bにより計算された値をデータグラムのヘッダに書き込む機能である。すなわち、このようなトラヒック観測装置8では、トラヒック観測機能8aにより得られたデータを用いて、プレファレンス値計算機能8bにより、ユーザのトラヒックの網に対するインパクト（負荷）を評価してその数値化を行い、それをデータグラムのヘッダに書き込むことを実現する。そして、前記トラヒック観測装置8のプレファレンス値挿入機能8cにより書き込まれるプレファレンス値は、図3に示すように、転送されるデータグラムのヘッダ部分におけるプレファレンス値を書き込むフィールドに保存する。このフィールドの値は、データグラム転送網内を転送される間変更されず、各データグラム転送装置Dに、網がトラヒック観測装置8において行った評価結果を伝える機能を実現する。

【0035】

図4は、この発明のデータグラム転送装置Dの出力I/F部2におけるバッファ書き込み制御部2cの構成を示し、これがプレファレンス値取り出し機能2c1、プレファレンス値比較機能2c2および書き込み制御機能2c3から構成される。これらのうち、プレファレンス値取り出し機能2c1は、到着したデータグラムのヘッダよりプレファレンス値を取り出して保持し、プレファレンス値比較機能2c2は、保持されている各プレファレンス値の比較を行い、到着したデータグラムに対しプレファレンス値のより小さいものが先になるような順序を与える。さらに、書き込み制御機能2c3は、プレファレンス値比較機能2c2の

結果を用い、プレファレンス値の小さいものから順に、輻輳状態とならない範囲で転送するデータグラムを選択し、それらを図14に示すようなバッファメモリ2bへ書き込む制御を行い、また、選択されなかったデータグラムは廃棄する制御を行う。

【0036】

図5は、この発明における書き込み制御機能2c3による書き込み処理方法を示すフローチャートである。これは、従来のFIFO方式とは違い、最初にプレファレンス値取り出し機能2c1により到着しているデータグラムのプレファレンス値のリストを取得する（ステップS11）。次に、プレファレンス値比較機能2c2により、この値をキーにしソーティングを行い（ステップS12）、データグラムにプレファレンス値の昇順に順序付けを行う（ステップS13）。そして、その順序に従って、書き込み制御機能2c3によりバッファメモリ2bへの書き込み処理を行い（ステップS14）、未処理のデータグラムがある場合には（ステップS15）、ステップS13以下の処理を実行し、ない場合には処理を終了する。

【0037】

この発明では、データグラムはデータグラム転送装置Dにおいて、到着順に処理されるのではなく、ヘッダに存在するプレファレンス値の小さいものが優先的に転送されることとなる。このプレファレンス値は、網がユーザのトラヒックを観測することで付与するため、たとえ、あるユーザが短い期間に多くのデータグラムを送信したとしても、それらのデータグラムにはトラヒック観測装置が大きなプレファレンス値をつけるようになり、データグラム転送装置Dでより低いプレファレンス値をもつデータグラムよりも高い確率で廃棄されてしまう。従って、短い期間に多くのデータグラムを送信することでデータグラムの廃棄も多くなるが、結果的により多くの網資源を獲得することが不可能となる。その結果、ユーザが多くの網資源の獲得を目的として不必要的データグラムを送出することを抑制でき、データグラム転送網が輻輳崩壊状態に陥る危険性を低くすることが可能となる。

【0038】

前記のプレファレンス値を用いた選択的データグラム転送方法は、網によるユーザトラヒックの評価とその数値化およびその数値による順序付けによる優先転送処理の二つの機能的要素からなり、これらの要素は、それぞれトラヒック観測装置8におけるプレファレンス値計算機能8bおよびデータグラム転送装置Dにおけるバッファ書き込み制御部2cの処理方法として実施されるものである。以下では、これらの二つについての実施例をそれぞれ述べる。

【0039】

前記のように、バッファ書き込み制御部2cでは、最初にプレファレンス値取り出し機能2c1により到着しているデータグラムのプレファレンス値のリストを取得し、プレファレンス比較機能として、このプレファレンス値をキーにしてソーティングを行い、データグラムにプレファレンス値の昇順に順序付けを行い、さらにその順序に従って、バッファメモリ2bへの書き込み処理を行っている。そしてプレファレンス値の取得処理は、適当な期間T毎に行う。この期間Tを長くすれば、その間に到着してソーティングの対象となるデータグラムの数が増加するため、多くのデータグラム間で優先順位の比較ができ、この発明の効果は大きくなるが、到着してから転送処理が行われ、出力リンクへ送信されるまでの遅延時間が大きくなる。この期間Tは、その点を考慮して最適な値を選択する。また、常に固定した期間でもよいが、データグラムの到着率に応じて適応的に期間を変更することも可能である。

【0040】

また、図6に示すように、図5の処理手順に加えてデータグラムのバッファメモリ2bへの書き込みをする前に、転送判断を別途行い（ステップS16）、この判断結果に基づき、転送を行わない場合には（ステップS17）、バッファメモリ2bに空き領域があっても廃棄を行うという処理手順をとることも可能である。一つのより具体的な例を図7に示す。既に処理を行いバッファメモリに書き込みを行ったデータグラムのプレファレンス値の総和を計算し（ステップS18）、それに基づいた確率を求め（ステップS19）、その確率に応じて廃棄を行うことが可能となる。この場合、後に処理されるデータグラム、つまりプレファレンス値の大きいデータグラムほど高い確率で廃棄されることになり、この処理

を行わない図5の場合に比べてこの発明の効果は大きくなる。また、この発明の書き込み処理方法は、インターネットのルータに用いられている前記RED方式との併用も可能である。図8はこのRED方式を併用した書き込み処理手順を示すフローチャートである。これによれば、最初にプレファレンス値のリストを取得し（ステップS11）、ソーティングを行うことで（ステップS12）、得られるデータグラムの順序付けに従って（ステップS13）、RED方式の転送処理手順が行われる。すなわち、バッファメモリ2bの使用量の概算を行い（ステップS20）、この概算値に基づいた確率を求め（ステップS21）、続いて転送判断を行った後（ステップS17）、その判断結果に従ってバッファメモリ2bへの書き込みまたは廃棄を行うという手順をとる。

【0041】

ところで、図6～図8の例では、プレファレンス値の取得処理を行う期間Tを適当に設定する必要がある。それに対して、図9に示す例では、到着したデータグラムは前記のように同時に到着したものが一度に処理されるのではなく、順番に一つずつ処理され、プレファレンス値を取得した後ソーティングを行うという処理を行わない。すなわち、あらかじめ決められた順に入力I/F部1を選択し（ステップS31）、そこから到着しているデータグラムの有無を調べ（ステップS32）、続いて図10に示すようなプレファレンス値取り出し機能2c1にてプレファレンス値の取得を行って（ステップS33）、このプレファレンス値の保存をプレファレンス値保存機能2c4に行う。さらにスレッショルド計算機能2c5において、適当なタイミングにてスレッショルド値を計算しておき（ステップS34）、到着したデータグラムのプレファレンス値とスレッショルド値との比較を行い（ステップS35）、プレファレンス値がスレッショルド値より大きい場合は、廃棄され、そうでなければ転送を行うという方法で、選択的なバッファ書き込み処理を行う（ステップS14）。この例ではデータグラムの選択順序を変える必要がないため、従来法からの改良が比較的簡単であるという特徴を持つ。なお、プレファレンス値とスレッショルド値の比較を行う場合に、プレファレンス値とスレッショルド値の差を入力とする関数により確率を計算し（ステップS35）、その確率によりデータグラムを廃棄する（ステップS17）と

いう方法も採用可能である。

【0042】

また、プレファレンス値と適当なタイミングにて計算しておいたスレッショルド値との比較を行い、選択的にデータグラムを廃棄する方法として、バッファ使用量を測定し、バッファ使用量に応じた確率を求め、データグラムを確率的に廃棄するRED方式に加え、計算しておいたスレッショルド値に比べて大きいプレファレンス値を持つものの廃棄確率をより高くする方法を採用することも可能である。この方法によれば、より多くの網資源を利用しようとして必要以上にデータグラムを送信するユーザのデータグラムを選択的に遮断することができる。すなわち、ここで採用される廃棄確率Bは、式(1)により求められる。

【0043】

【数1】

$$B = \begin{cases} \left(\frac{1}{(p - V) / mV} \right)^k & p > (m+1)V \\ 0 & (m+1)V > p > V, \quad k > 1 \cdots (1) \\ & V > p \end{cases}$$

【0044】

ここで、 $m = Q_{target} / Q_{current}$ で、 Q_{target} は固定パラメータ、 $Q_{current}$ は現在のバッファ使用量、 V はスレッショルド値、 p は到着データグラムのプレファレンス値である。この関数は、次のような特性を持つ。すなわち、 $V < p < (m+1)V$ では p の増加に伴い廃棄確率が上昇し、 k を大きくとると $(m+1)V$ 近辺で廃棄確率が急増する。 $(m+1)V$ 近辺の値のもつデータグラムは高確率で廃棄されるため、通常よく用いられている必要以上にデータグラムを送信しないTCPフローは、この値を上限にデータグラムの送信速度を低下させる。そのためTCPフローはスレッショルド値 V を中心に $(m+1)V$ 以下の範囲で安定化する。

【0045】

それにも拘らず、 $(m+1) \cdot V$ より大きな値をもつデータグラムはTCP以外のフローと推定でき、これらは必要以上にデータグラムを網に送信を行っていると判断できる。このような値をもつデータグラムを全て廃棄することにより、そのようなより多くの資源獲得を目指して必要以上にデータグラムを送信しようとするTCP以外のフローを遮断することができる。

【0046】

ここで、 m の値はバッファ使用量の変化からアダプティブに決定する。この m の計算式についての定性的な説明は、次の通りである。全てのフローからの総入力レートがリンクレートより小さいときには、バッファ使用量は0となり、 m は無限大になり、このとき入力データグラムは廃棄されない。一方、輻輳時にはバッファ使用量が増加し、この使用量の増加に応じて m が減少することから、大きなプレファレンス値を持つデータグラムから順に廃棄が行われる。これにより高い入力レートを持つフローから順にレート抑制を促すことができる。

【0047】

このようなデータグラムの選択廃棄方式のアルゴリズムは、下記の通りとなる。ここで、`rand(0, 1)`は`[0, 1]`の一様乱数を示す。

```

On receiving packet,
if(V!=0&&Qcurrent!=0) {
    m=Qtarget/Qcurrent;
    if((m+1)*V<p) {
        dropPkt(); //廃棄
        return;
    } else {
        if(V<p) {
            if(pow((p-V)/(m*V), k)>rand(0,1)) {
                dropPkt(); //廃棄
                return;
            }
        }
    }
}

```

}

【0048】

いま、輻輳時に入力レートを削減しないフロー (unresponsive flow) の遮断について、19本のTCPフローと、1本のCBRフローを1本のリンクに混在させた条件下で、各フローへの割当帯域評価のシミュレーションを行うと、下記の通りとなる。CBRフローの入力レートをRcbfとしたとき、各フローが100秒間に得られる割当帯域を測定すると、図11に示すようになる。ここでは、CBRフローの入力レートを横軸に、そのとき得られた各フローの割当帯域を縦軸に、プロットして示してある。20本のフローを多重化していることから、公平な割当帯域は1Mbpsと考えられる。このため、CBRの入力レートが1Mbpsより小さい場合には、CBRのパケットは廃棄されない。CBRが1Mbpsより大きい入力レートでパケットを入力すると、前記遮断のメカニズムが働いて、CBRからのパケットは選択的に廃棄され始めることがある。

【0049】

また、CBRフローのパケットは、入力レート値が2Mbps前後から廃棄され始め、このように廃棄される値が公平な割当帯域1Mbpsより大きい。これは、TCPの入力レートの分布の分散が大きく、式(1)のパラメータmが大きいため、廃棄されるパケットラベル値が2Mbps程度になるためである。このことは、バースト性の少ないトラヒックとバースト性の大きいトラヒックの間では、よりバースト性の少ないフローに対して大きい帯域を割り当てるに起因する。

【0050】

この発明におけるデータグラム転送装置Dにおけるバッファ書き込み制御部2cは、あらかじめ決められた範囲のデータグラムの到着、転送、廃棄等のいずれかの事象が起った時刻と、そのプレファレンス値を保存する機能を具備している。また、前記スレッシュルド値は、それらの各値を用いて以下に示すような値として計算する。

1. 転送した過去n個のパケットに関する平均値／メジアン／平均+分散／平均

+標準偏差／移動平均／分布の最頻値

2. 到着した過去n個のパケットに関する平均値／メジアン／平均+分散／平均
+標準偏差／移動平均／分布の最頻値

3. 廃棄された過去n個のパケットに関する平均値／メジアン／平均+分散／平均
+標準偏差／移動平均／分布の最頻値

4. 過去t秒以内に転送したパケットに関する平均値／メジアン／平均+分散／平均
+標準偏差／移動平均／分布の最頻値

5. 過去t秒以内に到着したパケットに関する平均値／メジアン／平均+分散／平均
+標準偏差／移動平均／分布の最頻値

6. 過去t秒以内に廃棄したパケットに関する平均値／メジアン／平均+分散／平均
+標準偏差／移動平均／分布の最頻値

7. 過去t秒以内に転送した、過去n個のパケットに関する平均値／メジアン／平均
+分散／平均+標準偏差／移動平均／分布の最頻値

8. 過去t秒以内に到着した、過去n個のパケットに関する平均値／メジアン／平均
+分散／平均+標準偏差／移動平均／分布の最頻値

9. 過去t秒以内に廃棄した、過去n個のパケットに関する平均値／メジアン／平均
+分散／平均+標準偏差／移動平均／分布の最頻値

【0051】

また、スレッショルド値の他の計算方法として、以下の(a)、(b)のように、到着データグラムのプレファレンス値を観測し、その分布から統計的に計算する方法も採用可能である。

(a) 到着データグラムから確率 P_a でランダムに N_a 個選択してプレファレンス値を抽出する。

(b) 抽出した N_a 個のプレファレンス値を順序付けし、そのメジアンを新たなスレッショルド値とする。

【0052】

スレッショルド値は、到着するデータグラムのプレファレンス値分布に依存し、また、スレッショルド値によりデータグラムの転送状況が変化し、それがユーザーのデータグラム選出方法の変更を促し、結果的に到着するデータグラムのプレ

ファレンス値分布が変化することとなる。このスレショルド値の変更方法には、これらの変化が安定状態となるような適切な値にできるだけ短い時間で到達することが要求される。

【0053】

この方法によれば、抽出するデータグラムの個数 N_a により、スレッショルド値の更新時間を調節することができ、これにより適切な値に到達するまでの時間を制御することができる。リンク速度でデータグラムが到着する際のスレッショルド値更新時間は近似的に、 $(N_a / P_a) \times \text{pkt size} / \text{link rate}$ で表わされる。ここで、 pkt size はデータグラム長 [bit]、 link rate は多重化リンク速度 [bit/s] である。

【0054】

いま、TCPフローのレート観測分布とラベルサンプリングにより観測されたメジアンの分布をシミュレーションにより評価すると次のようになる。図12はFIFOキューを持つリンクに20本のTCPを100s間多重化した場合の、TCPフローのラベル分布および $N_a = 100$ 、 $P_a = 0.1$ の場合に観測されたメジアンの分布を示す。ここで、TCPのラベルは、文献、Ion Stoica, Scott Shenker, Jui Zhang, "Core-Stateless Fair Queuing: Achieving Approximately Fair Bandwidth Allocations in High Speed Networks" SIGCOM98, 1998のレート観測方式を用いた（時定数 $k = 400\text{ms}$ ）。また、リンクの伝播遅延を60msとしてある。

【0055】

また、図13はリンク伝播遅延を変化させた場合について同様に観測メジアンを評価し、メジアンの平均値を評価した結果である。このようなメジアンを用いてフローの平均入力レートを推定することができる。

【0056】

次に、出力I/F部2に複数のクラス別バッファメモリ部を持つバッファメモリ2bを図14に示す。これらのクラス別バッファメモリ部はそれぞれ優先順位

をもっており、その優先順位に従ってバッファ読み出し制御部2dにより読み出しが行われる。バッファ書き込み制御部2cは、プレファレンス値比較機能により与えられた順位に従って、複数の優先順位を持ったクラス別バッファメモリ部の選択を行い、そこにデータグラムを書き込む。具体的には以下の処理をバッファ書き込み制御部2cにおいて行う。すなわち、いま、n個の優先順位を持ったキューが存在し、1～nまでの番号が割り振られている場合を考え、番号が小さいものほど優先順位は高いものとする。また、プレファレンス値が取りうる値をn個の区間に分割し、プレファレンスの昇順に1～nの番号を割り振る。さらに、区間iのプレファレンス値を持ったデータグラムをiのキューに割り振る。以上の処理をバッファ書き込み制御部において行うことにより、小さいプレファレンス値を持つデータグラムほど優先度の高いバッファメモリに割り振られることとなり、この発明の効果を実現することが可能となる。

【0057】

この発明では、通常のデータグラム（例えばIP）のヘッダに存在するデータグラムのサイズフィールドをプレファレンス値として利用することができる。これに対し、以下に示す例では、トラヒック観測装置8においてトラヒックの観測により計算された値をデータグラムのヘッダの特別なフィールドに挿入することを基本としている。しかし、この例ではデータグラムのフォーマットに特別なフィールドは必要ない、但しデータグラムのサイズは網がつけるものではなくユーザ端末がつける値であるため、トラヒック観測装置8は、書かれているデータグラムのサイズの値と実際のサイズが正しいかどうかというテストを行い、正しくない場合にはそのデータグラムを廃棄する処理を行う。

【0058】

また、プレファレンス値の他の計算機能として、一つ前のデータグラムの送出時刻と、現在時刻との差の逆数（データグラム転送間隔の逆数）を用いることができる。この場合には、現在時刻をt、現在到着したデータグラムの大きさをMとし、また、一つ前のデータグラムの送出時刻をt_i、データグラムの大きさをM_i、 α を影響度の度合を調整する定数とすると、 $\alpha (M/M_i) \{1/(t-t_i)\}$ 式で表現される値を用いる。この値は、瞬間的なユーザのトラヒックの

速度を意味する値であるため、この値が大きいほど網に対するインパクトが大きいと判断することが可能である。

【0059】

さらに、プレファレンス値の他の計算機能として、データグラムのサイズおよび連続するデータグラムの間隔から計算する平均レート（スライディングウインドウ方式）を用いることができる。この場合には、現在から i 個以前のデータグラムの大きさを M_i 、到着時刻を t_i 、遡るデータグラム数を n 、影響の度合を調整する定数を α_i とすると（ n 、 α_i はあらかじめ設定された値）、平均レート V_K は、 $\alpha_i M_i / (T_i - T_{i+1})$ の i が $0 \sim n$ までの和として求められる。

【0060】

この値 V_K は前記データグラムの転送間隔の逆数を用いた場合より長い時間間隔でみた平均レートとなるので、やはり網に対するインパクトを評価することが可能である。

【0061】

また、プレファレンス値の他の計算機能として、データグラムのサイズおよび、連続するデータグラムの間隔から計算する観測期間の平均レートを用いることができる。すなわち、観測期間を TA とすると、この観測期間 TA に到着したデータグラムのサイズの和を、観測期間 TA で除算したものを利用する。また、データグラムのサイズの和そのものを用いることも可能であり、また、その和をアクセス網の物理リンク速度より決まる和の最大値で除算し、正規化を行った値とすることも可能である。

【0062】

また、プレファレンス値の他の計算機能として、ユーザが送出したデータグラムの個数と、受信したデータグラムの個数の差を用いることができる。通常、データグラム転送網を適正に用いる場合には、データグラムの配達が保証されないため、ユーザ端末は正しく受信できたデータグラムに対し、正しく受信できたことを送信ユーザ端末に知らせる ACK データパケットを送信する。従って、このような適正な方法を用いてデータグラム通信網を利用する場合には、送信したデ

ータグラム数と受信したデータグラム数はほぼ等しくなる。一方、この発明が課題とするような方法をユーザがとる場合には、網内で多くのデータグラムが廃棄され、それに対するACKデータパケットが送信されないため、送信データグラム数と受信データグラム数には大きな開きができると考えられる。従って、この差をプレファレンス値とすれば、適正な利用方法を行っているものがより優先的に転送されることとなり、この発明の効果を得ることが可能となる。

【0063】

【発明の効果】

以上のように、この発明によれば、データグラム転送／廃棄方法を実現するデータグラム転送装置を用いることで、ユーザが多くの網資源を獲得しようとして必要以上のデータグラムを送出することを抑制でき、これによって輻輳崩壊状態に陥らない安定したデータグラム通信網を実現できるという効果が得られる。

【図面の簡単な説明】

【図1】 この発明の実施の一形態によるデータグラム転送システムを示すブロック図である。

【図2】 図1におけるトラヒック観測装置の詳細を示すブロック図である。

【図3】 この発明におけるデータグラムのヘッダフィールドを示す説明図である。

【図4】 この発明における出力インターフェース部内のバッファ書き込み制御部を示すブロック図である。

【図5】 この発明における書き込み制御機能によるバッファメモリへの書き込み手順を示すフローチャートである。

【図6】 この発明における書き込み制御機能によるバッファメモリへの他の書き込み手順を示すフローチャートである。

【図7】 この発明における書き込み制御機能によるバッファメモリへの他の書き込み手順を示すフローチャートである。

【図8】 この発明における書き込み制御機能によるバッファメモリへの他の書き込み手順を示すフローチャートである。

【図9】 この発明における書き込み制御機能によるバッファメモリへの他の書き込み手順を示すフローチャートである。

【図10】 この発明における出力インターフェース部内のバッファ書き込み制御部の他の例を示すブロック図である。

【図11】 この発明の実施の形態による過入力のCBRフローの遮断特性を示す特性図である。

【図12】 この発明の実施の形態によるTCPのラベル値分布特性を示す特性図である。

【図13】 この発明の実施の形態による観測メジアン値の分布状況を示す説明図である。

【図14】 この発明における出力インターフェース部の他の例を示すブロック図である。

【図15】 従来およびこの発明のデータグラム転送装置の基本構成を示すブロック図である。

【図16】 図12における入力インターフェース部の従来例を示すブロック図である。

【図17】 図12における出力インターフェース部の従来例を示すブロック図である。

【図18】 従来のファーストインファーストアウト方式によるデータグラム転送手順を示すフローチャートである。

【図19】 従来のランダムアーリーディテクション方式によるデータグラム転送手順を示すフローチャートである。

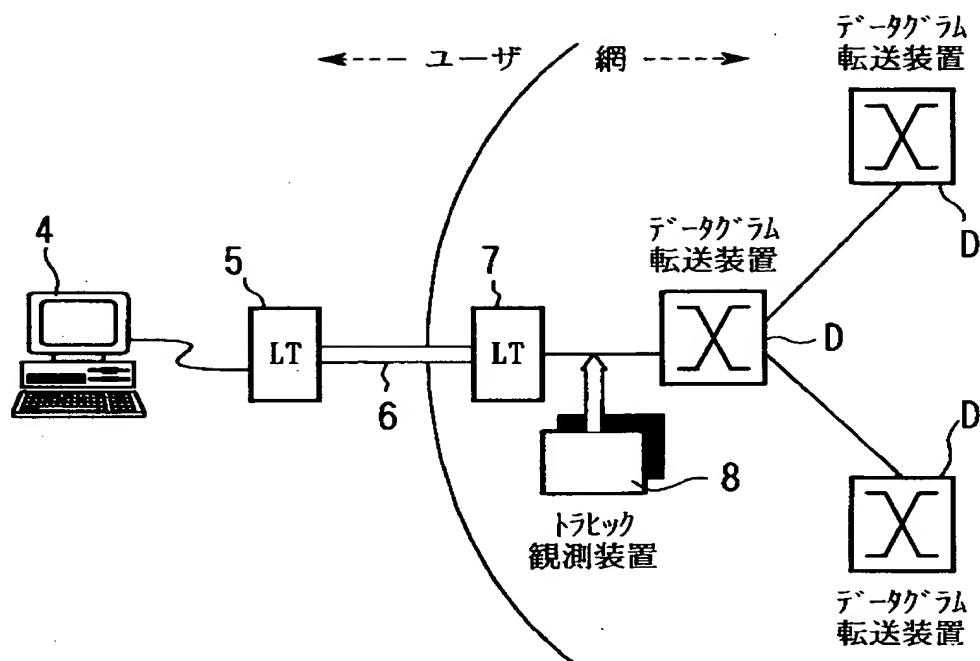
【符号の説明】

- 1 入力I/F部（入力インターフェース部）
- 2 出力I/F部（出力インターフェース部）
- 2c バッファ書き込み制御部
- 2c4 プレファレンス値保存機能
- 3 バックプレーンスイッチ部
- 8 トラヒック観測装置

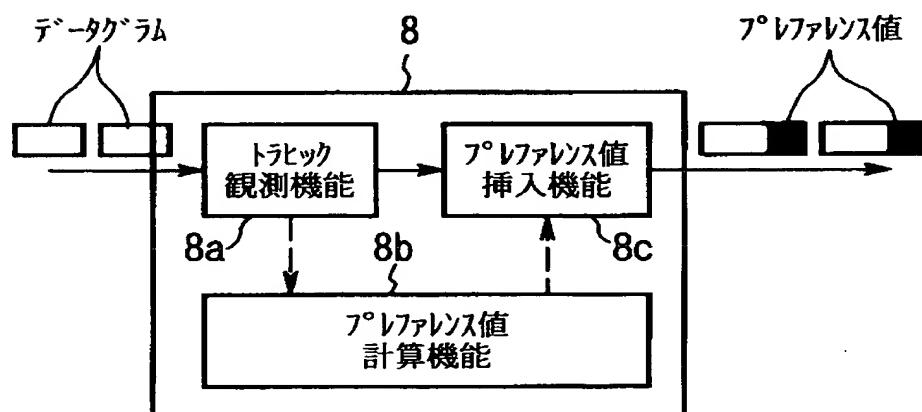
- 8 a トランジック観測機能
- 8 b プレファレンス値計算機能
- 8 c プレファレンス挿入機能

【書類名】 図面

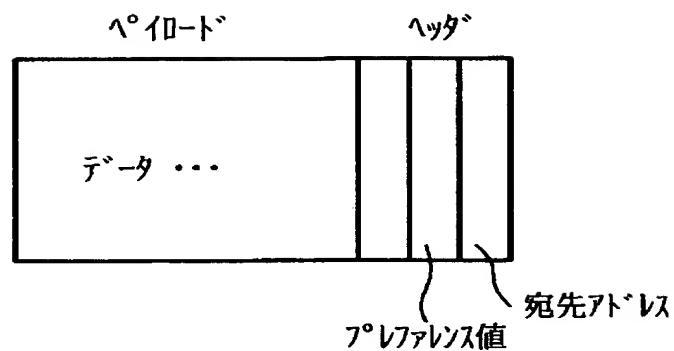
【図 1】



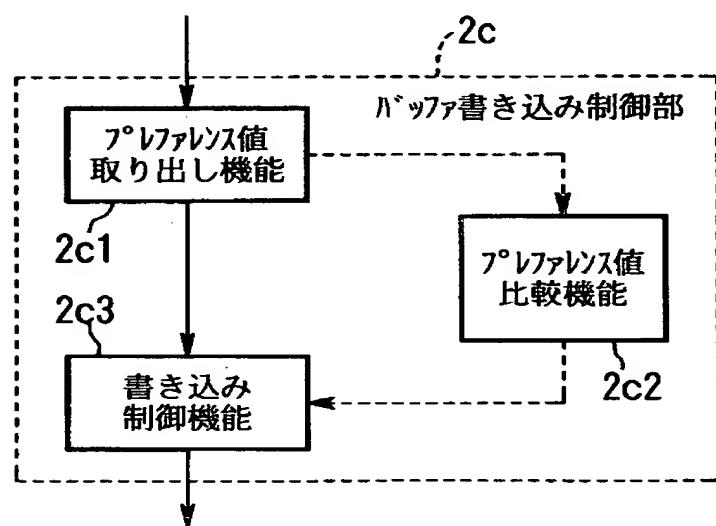
【図 2】



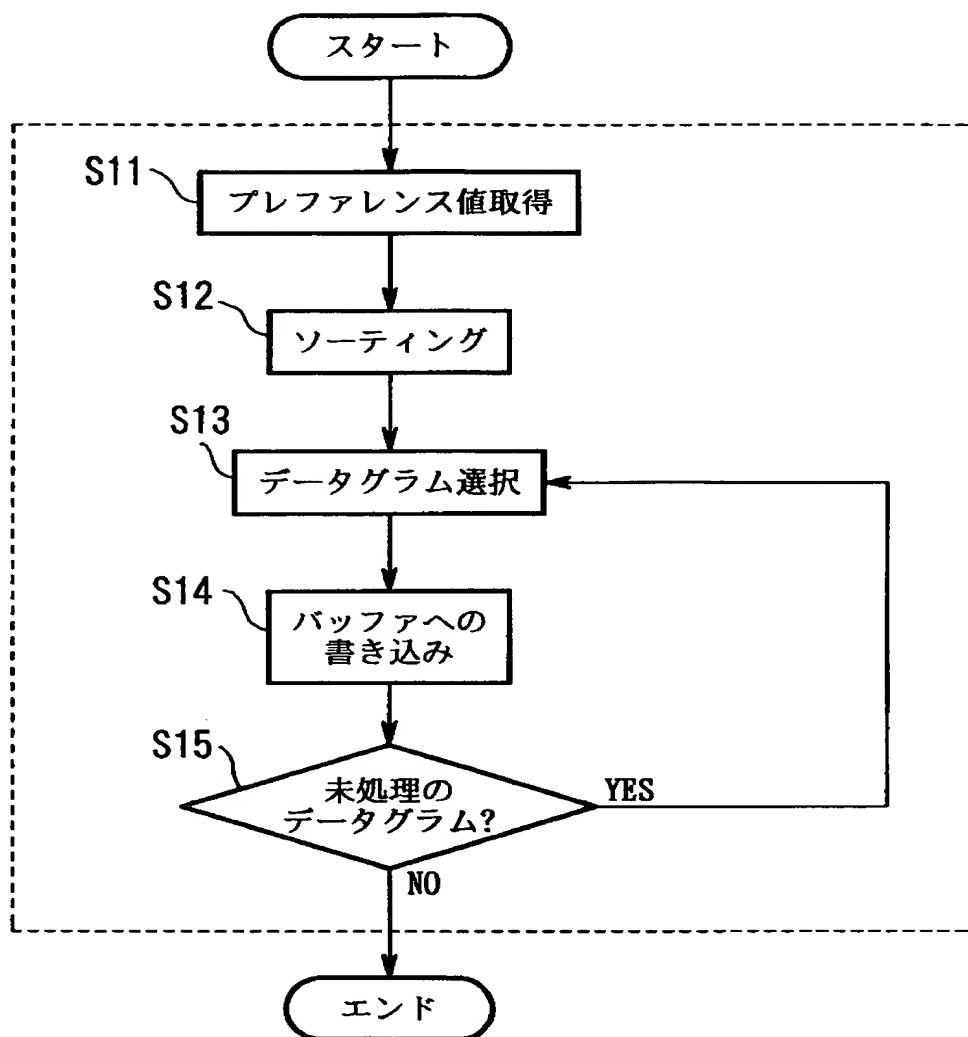
【図3】



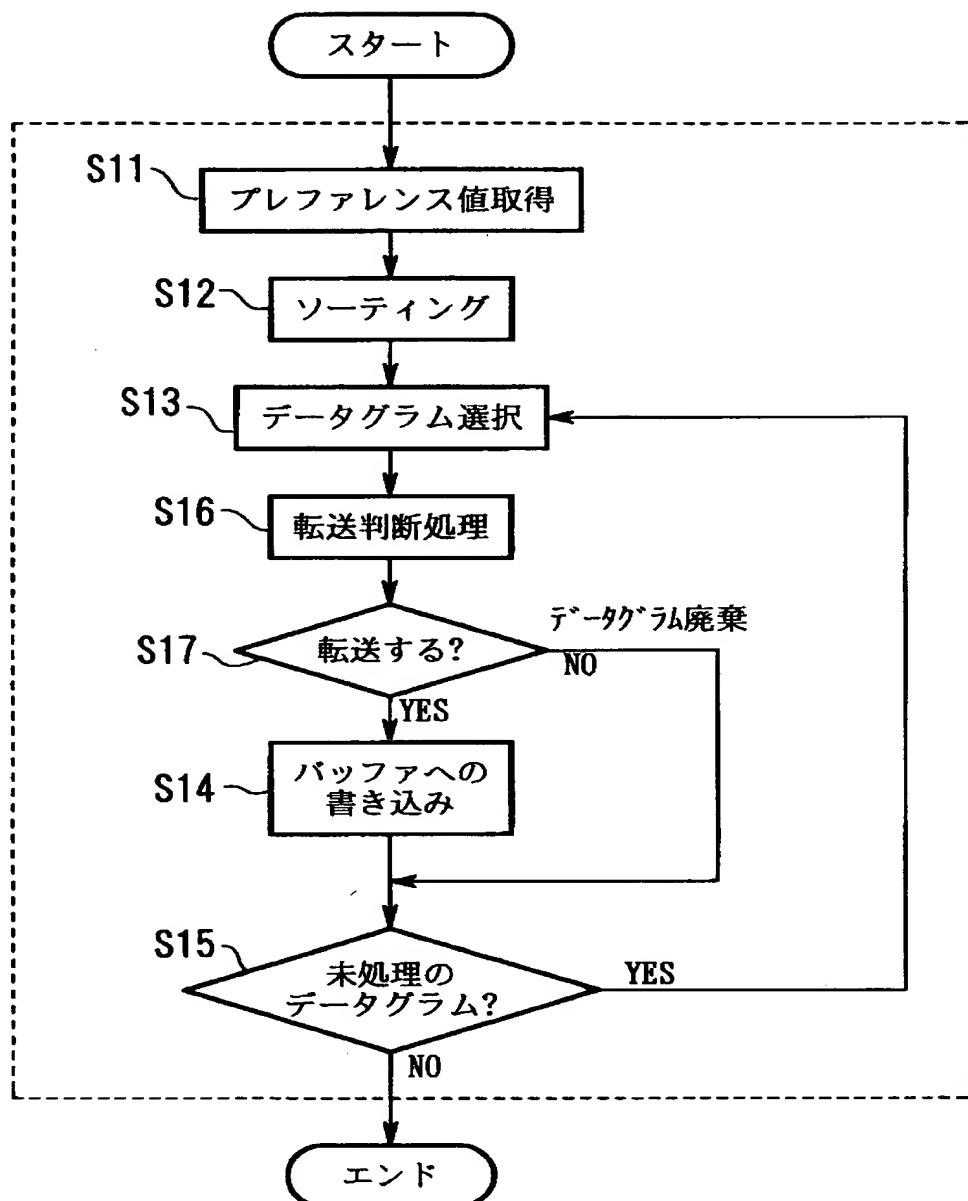
【図4】



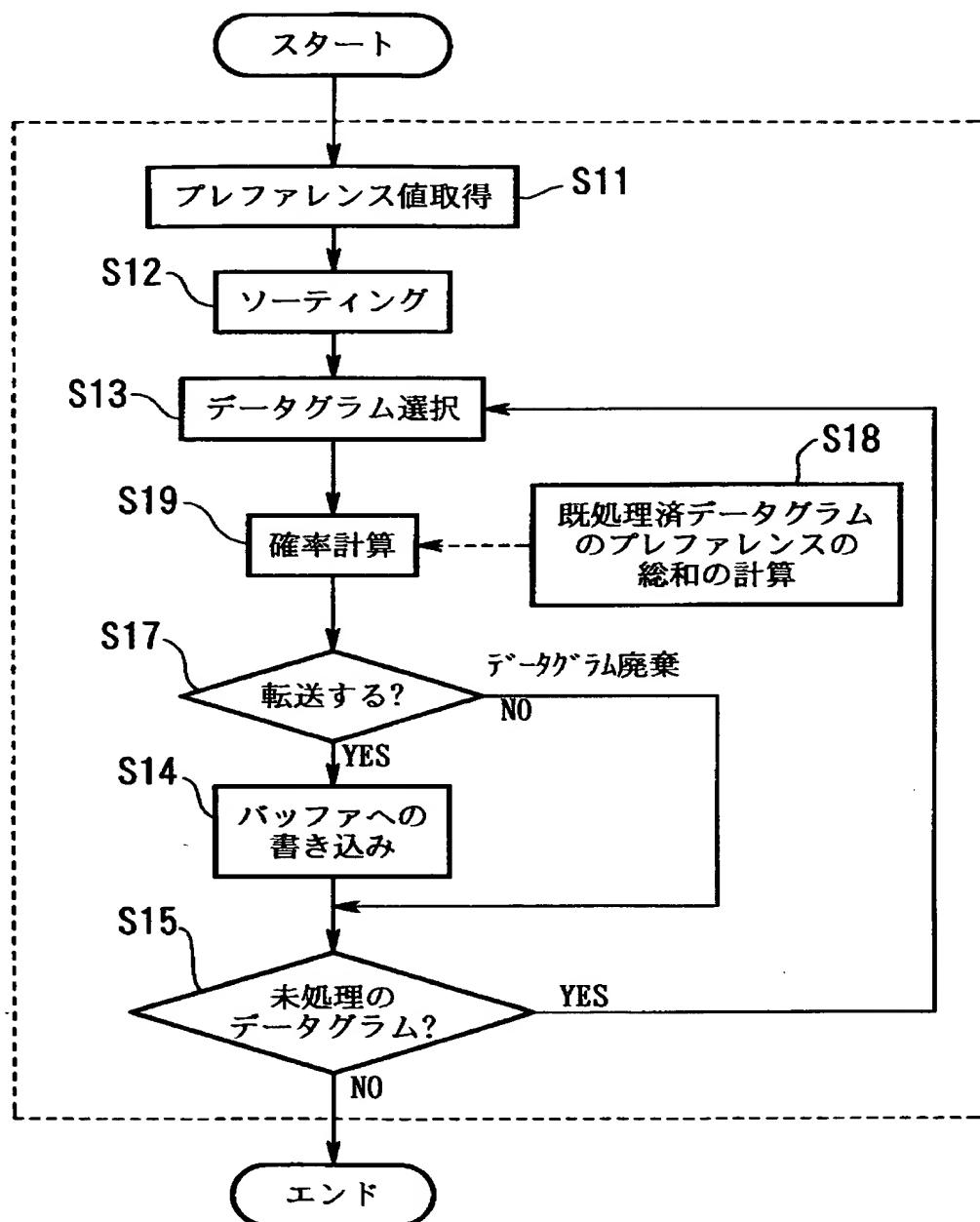
【図5】



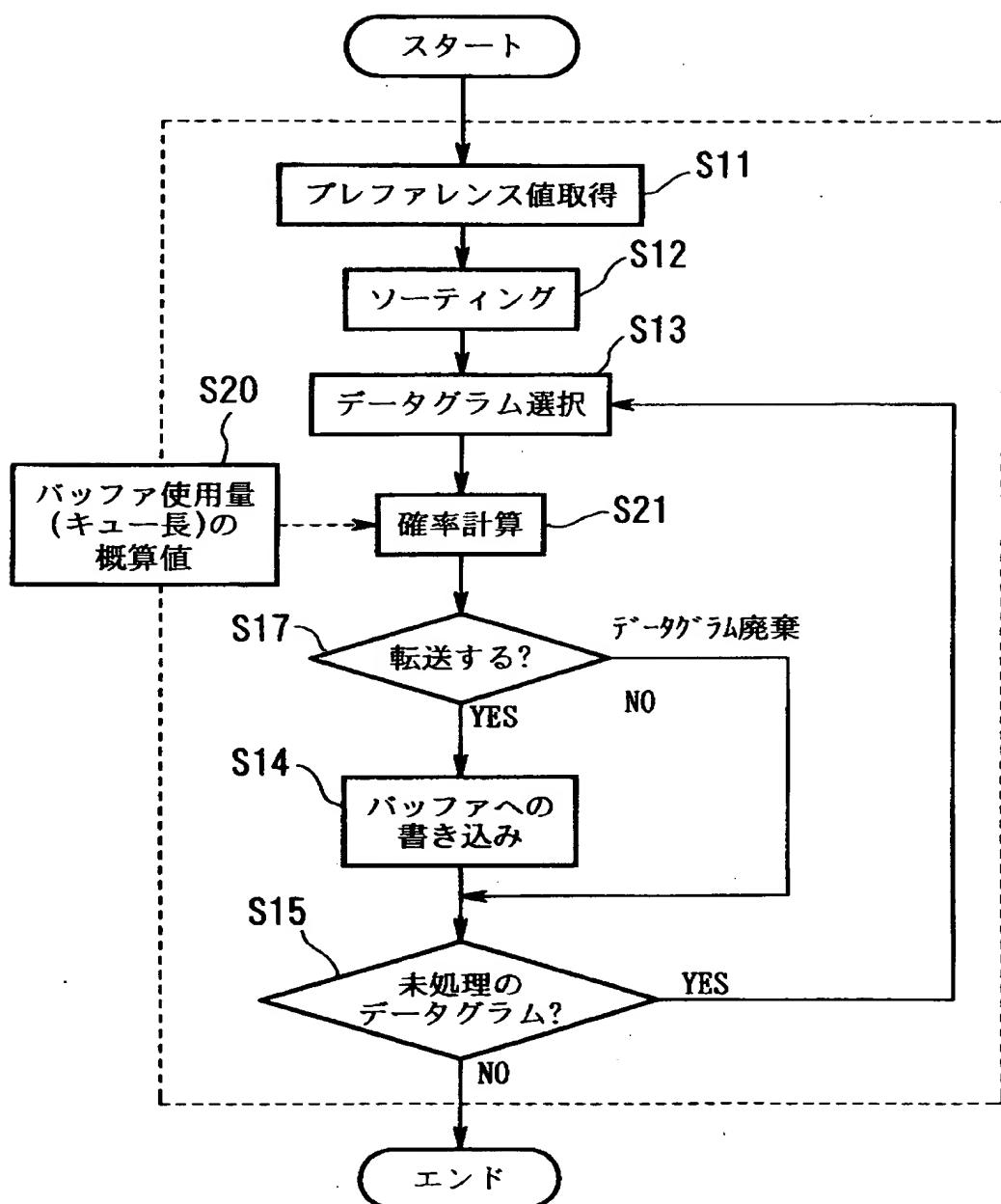
【図6】



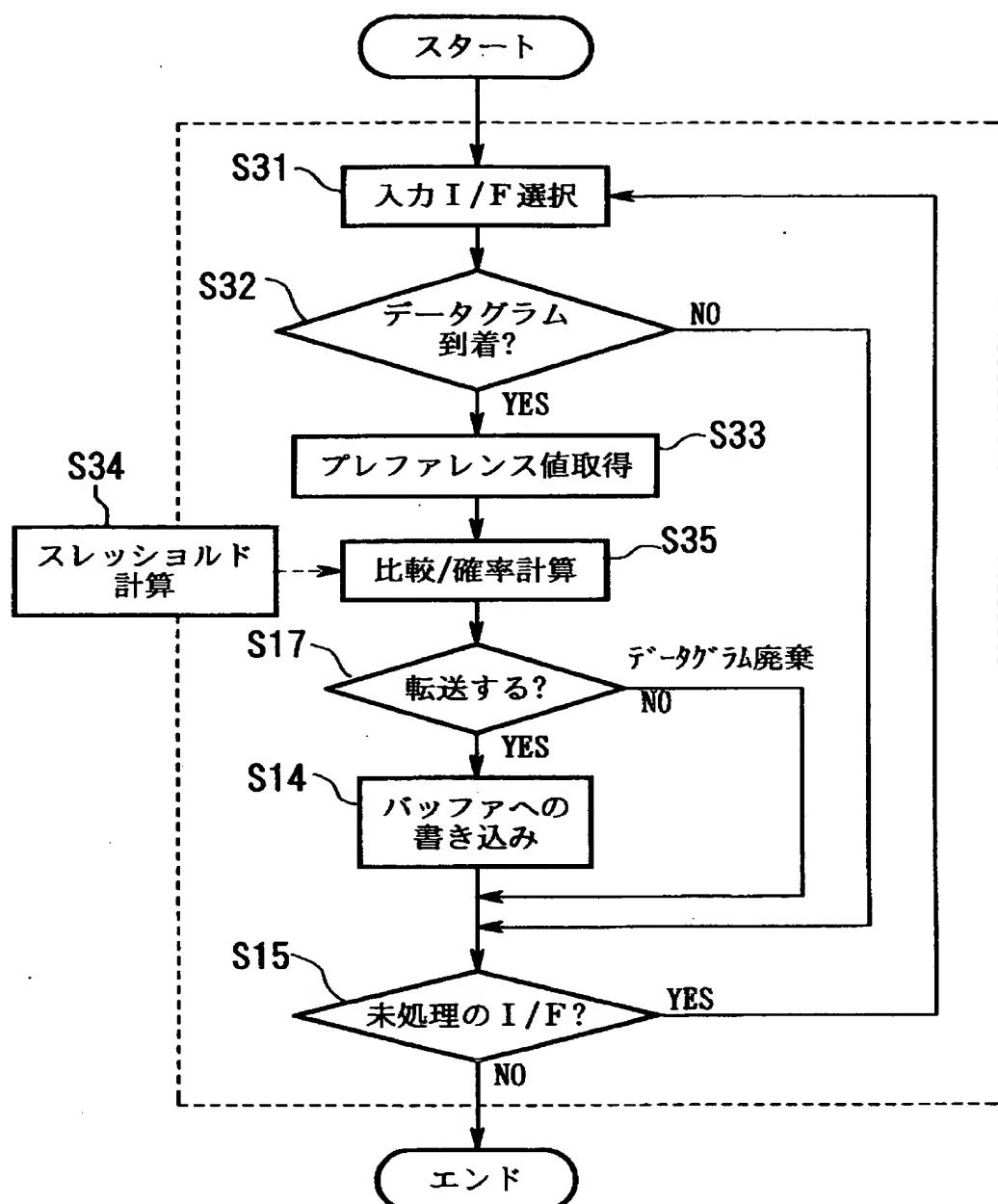
【図7】



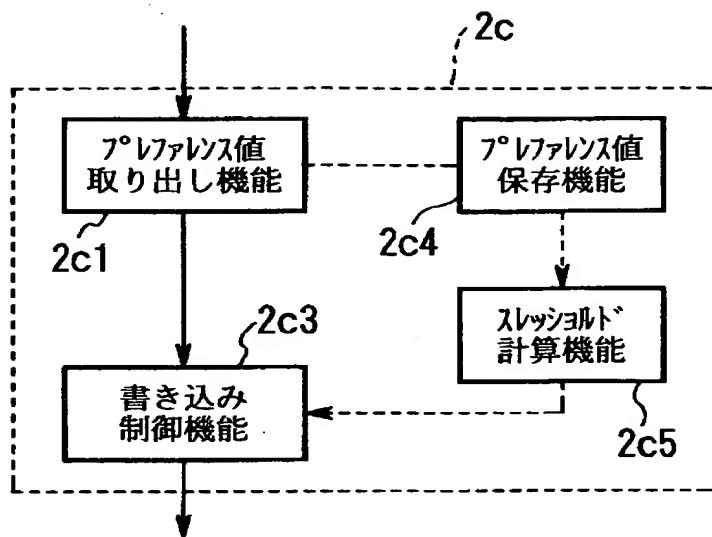
【図8】



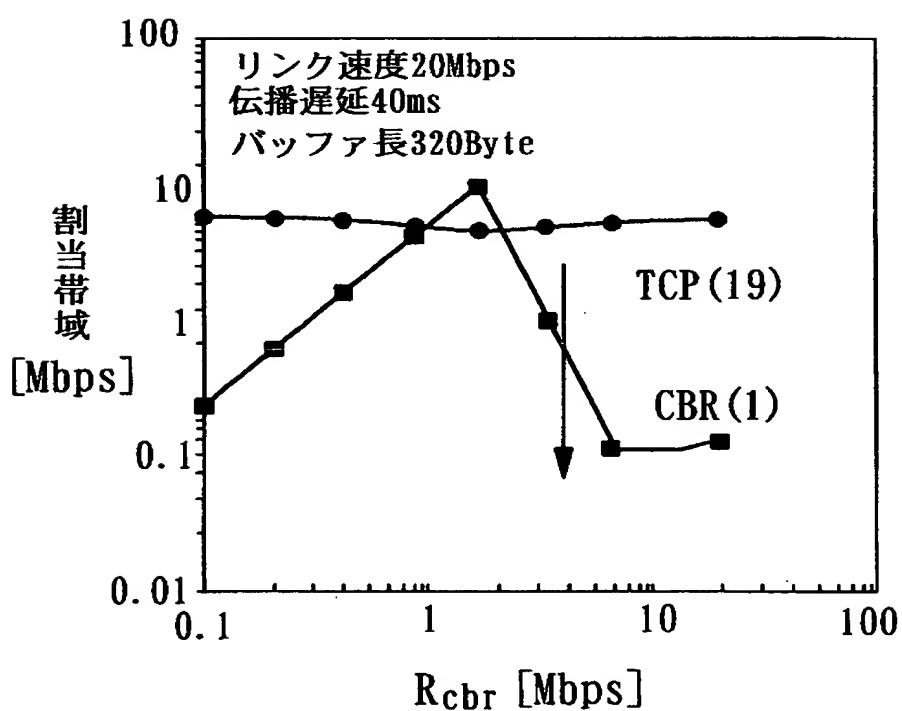
【図9】



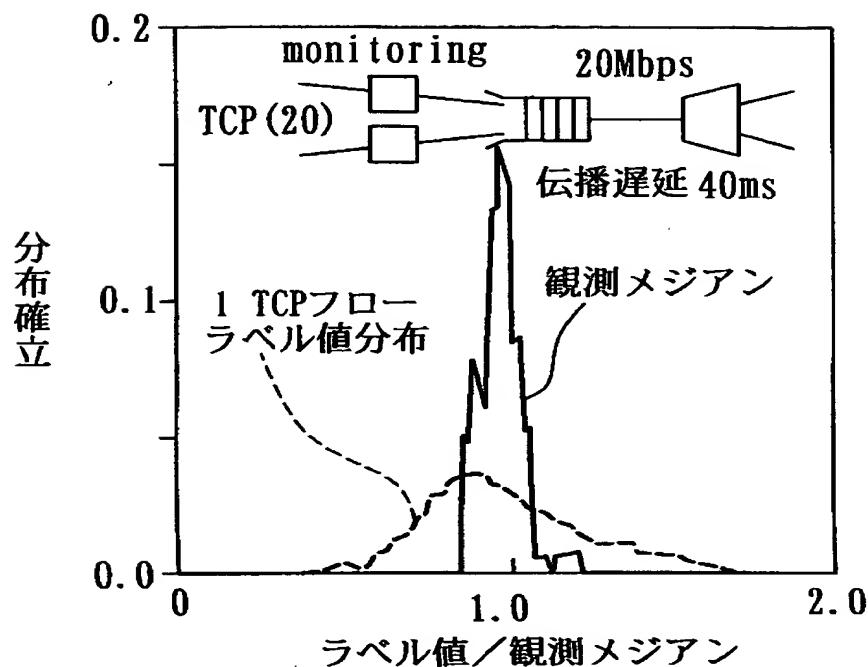
【図10】



【図11】



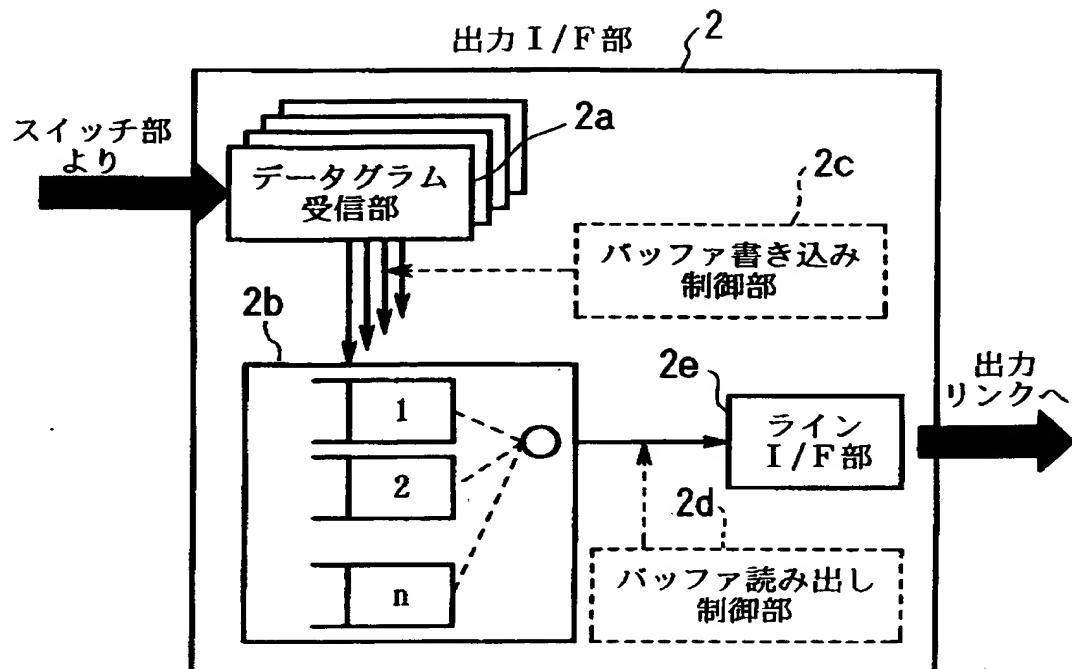
【図12】



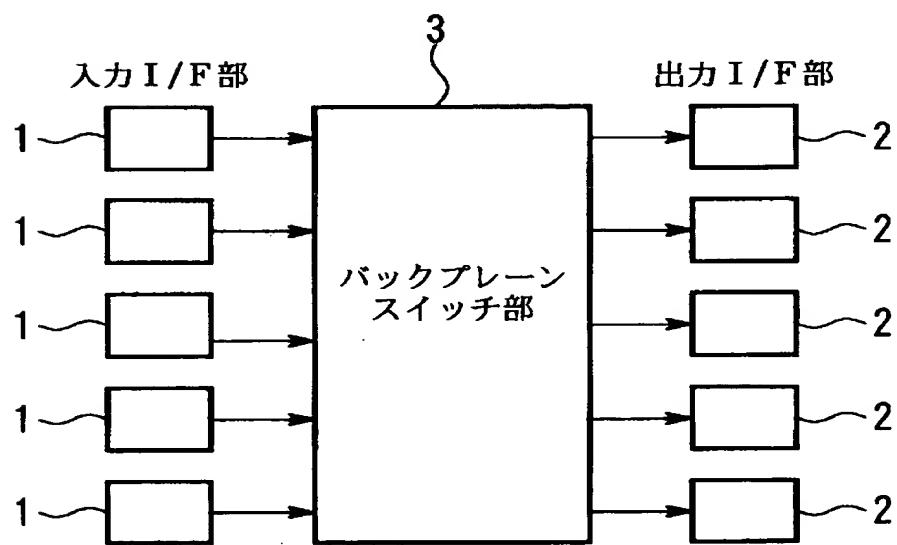
【図13】

リンク伝播遅延 [ms]	観測メジアンの平均値 [Mbps]
4	1.03E+06
20	1.02E+06
40	1.02E+06
60	1.04E+06
80	1.04E+05

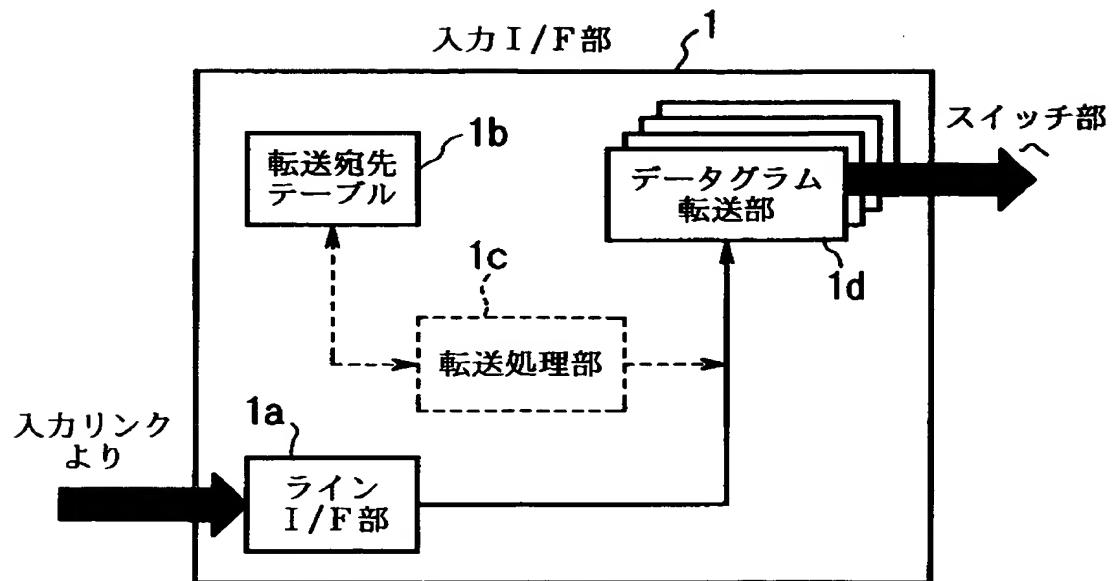
【図14】



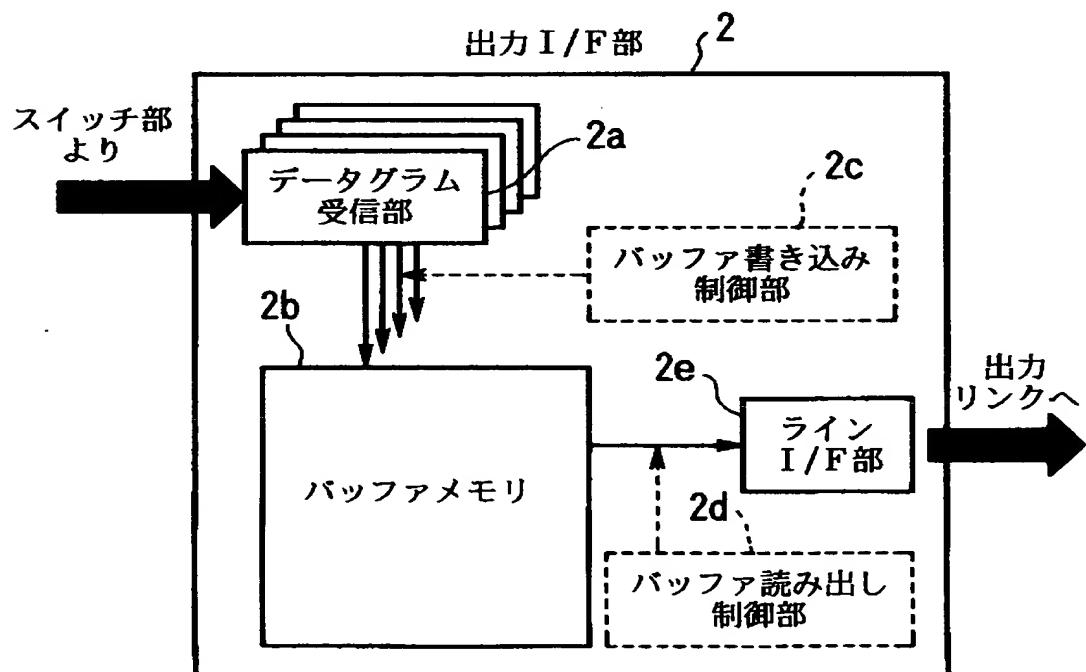
【図15】



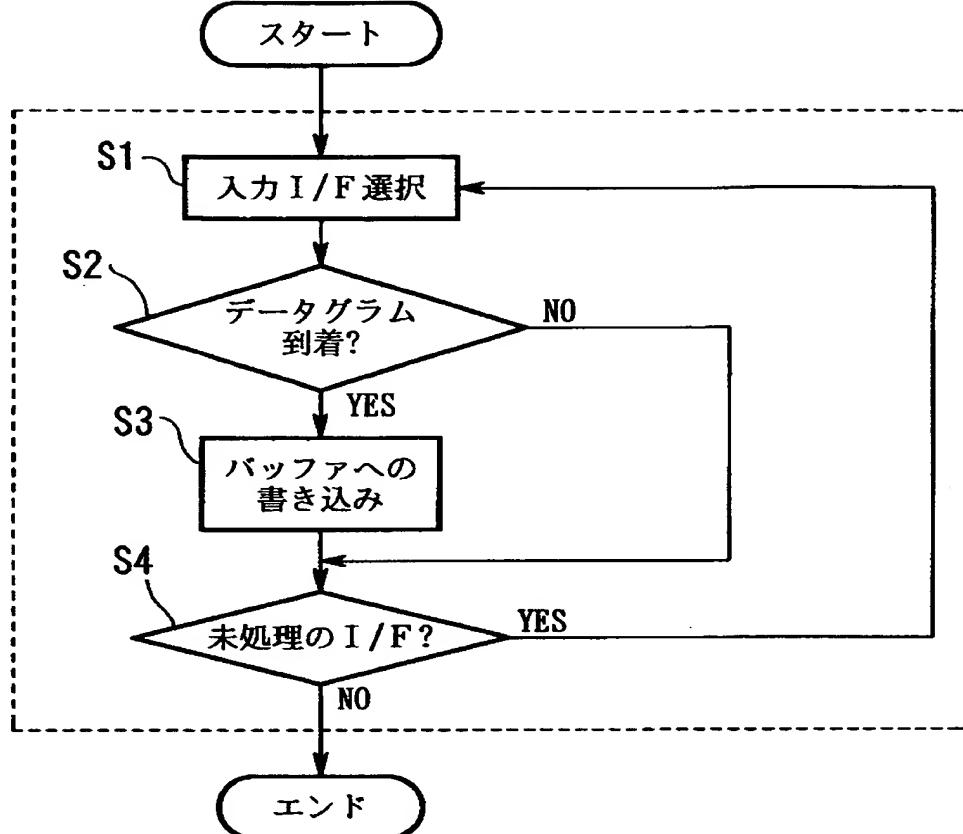
【図16】



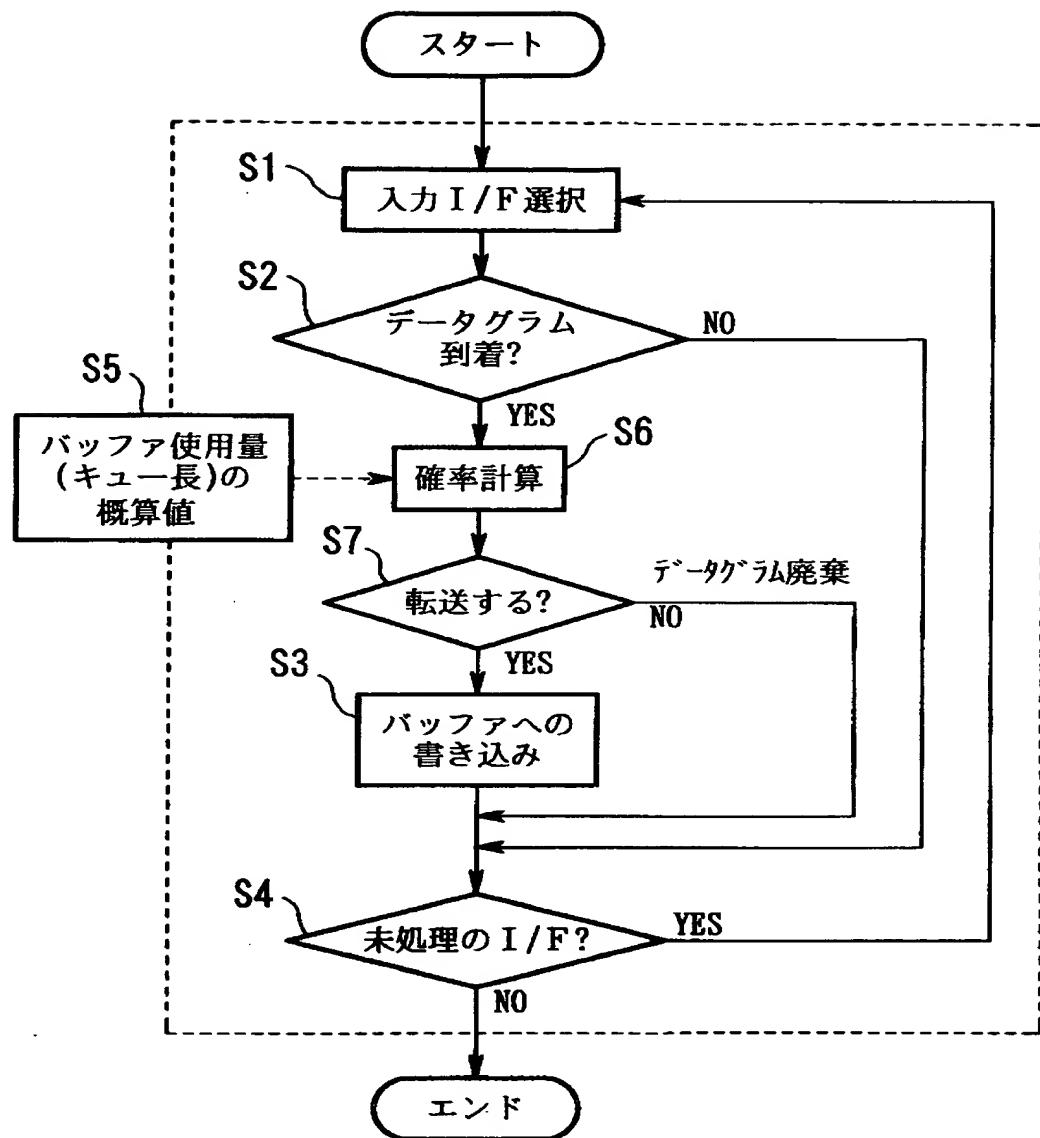
【図17】



【図18】



【図19】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 データグラムの送出に対する網の評価により得られる情報をを利用して転送処理を行うことで、輻輳崩壊状態に陥らない安定したデータグラム通信網を実現可能にする。

【解決手段】 データグラムのヘッダに記載された転送宛先アドレスに向ってデータグラムをリレーするデータグラム転送システムにあって、データグラムに関するトラヒック情報に基づいてユーザのトラヒックの網に対するインパクトを評価し、その評価値をヘッダに書き込んで、この評価に従った順序による転送処理を行わせるトラヒック観測手段8を設ける。

【選択図】 図1

認定・付加情報

特許出願の番号	平成11年 特許願 第110152号
受付番号	59900368329
書類名	特許願
担当官	第八担当上席 0097
作成日	平成11年 4月22日

<認定情報・付加情報>

【特許出願人】

【識別番号】	000004226
【住所又は居所】	東京都新宿区西新宿三丁目19番2号
【氏名又は名称】	日本電信電話株式会社
【代理人】	申請人
【識別番号】	100064908
【住所又は居所】	東京都新宿区高田馬場3丁目23番3号 ORビル 志賀國際特許事務所
【氏名又は名称】	志賀 正武

次頁無

出願人履歴情報

識別番号 [00004226]

1. 変更年月日 1995年 9月21日

[変更理由] 住所変更

住 所 東京都新宿区西新宿三丁目19番2号

氏 名 日本電信電話株式会社

2. 変更年月日 1999年 7月15日

[変更理由] 住所変更

住 所 東京都千代田区大手町二丁目3番1号

氏 名 日本電信電話株式会社